

# ビデオアノテーションシステム FishWatchr を用いた 日本語教育授業のふりかえりにおける気づきの共有方法の分析

## An Analysis of Awareness Sharing in Group-reflection on Teaching Activities of a Japanese-Language Teacher Using the Video Annotation System “FishWatchr”

山口 昌也 \*1, 青木 さやか \*2, 森 篤嗣 \*2

Masaya YAMAGUCHI\*1, Sayaka AOKI\*2, Atsushi MORI\*2

\*1 国立国語研究所, \*2 京都外国語大学

\*1 National Institute for Japanese Language and Linguistics, \*2 Kyoto University of Foreign Studies

あらまし 本発表は、ビデオアノテーションシステム FishWatchr を日本語教育関連の大学院の授業に導入し、日本語教師の授業のビデオ観察とふりかえりを実践した結果を報告する。ふりかえりでは、学生がビデオと観察結果に基づいて、気づきを発表し、クラスで共有する。本発表では、ふりかえりを収録したビデオにより、学生の気づきがどのように共有されるかを分析し、(a) 二つの共有パターンを図式化して示すとともに、(b) 観察結果に基づく気づきの共有が実現できているかを検証した。

キーワード 授業観察, ふりかえり, 日本語教育, ビデオアノテーション

### 1. はじめに

我々は、これまでビデオアノテーションシステム FishWatchr(以後、FW)<sup>1)</sup>をプレゼンテーション練習などの教育活動に導入し、観察結果に基づいて、ふりかえりを行う方法について実践してきた[1, 2]。今回は、その一環として、日本語教師が行った授業のビデオを、日本語教育学専攻の学生がFWで観察し、ふりかえりで得た気づきを全員で共有する、という実践を行った。本発表では、(a) 実践で行われた気づきの共有形態を明らかにし、(b) 観察結果に基づく気づきの共有が実現できているかを検証する。

### 2. 実践内容

#### 2.1 実践の流れ

実践は、著者の一人が担当している大学院修士課程の日本語教育関連の授業(100分)で行った。学生は6名(日本人学生3名(うち科目履修生2名)+中国人留学生3名)である。実践の流れは、次のとおりである。

- (1) 本実践の趣旨説明(10分)
- (2) FWのセットアップと観察方法の説明(15分)
- (3) FWを用いたビデオ観察(30分)
- (4) 合同ふりかえり(45分)

実践に用いた授業ビデオは、日本の日本語学校で行われた45分授業(うち15分を観察に使用)を撮影したものである。教師の日本語教育歴は4年半、受講者は初級前半レベルの10名である。

<sup>1)</sup> <http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fw>

#### 2.2 授業ビデオの観察

授業ビデオの観察は、学生持参のPC(Windows・4名, macOS・2名)上にインストールしたFWで実施した。観察時はFW右上の画面(図1)でビデオを表示し、何か気づいたシーンでアノテーションする。具体的には、FWのアノテーションボタン(図下部)で「評価の観点」を入力すると、「評価」用のボタンが現れ(図右下部)、選択すると、アノテーションリストに一つのアノテーションが観察者名付きで追加される。この際、コメント欄に自由記述でアノテーションに対するコメントを入力する。なお、今回の実践で使用した「評価の観点」「評価」用のボタンは、次のとおりである。  
評価の観点 「教師の話し方」「教師の行動」「教材・板書」「学習者とのやりとり」「その他」  
評価 「いいね」「うーん」

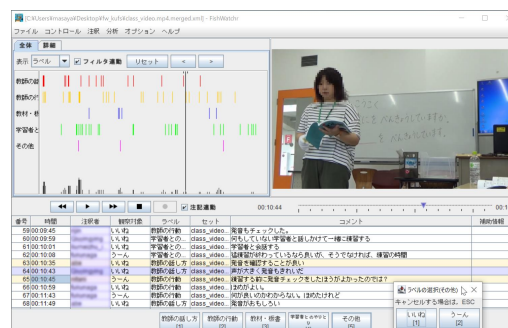


図1: 観察支援システム FishWatchr

#### 2.3 合同ふりかえり

観察後、全員のアノテーション結果を統合し、合同でふりかえりを行った。基本的な流れは、観察

時のアノテーションに基づき、学生が一人ずつ気づきを数カ所発表し、クラス全体で議論するというものである。今回は、3名の学生が発表を行った。ふりかえり全体は、筆者の一人がコーディネータ(以後、進行役)として統括した。

本研究では、観察結果に基づいて気づきを共有することを重視する。そのため、ふりかえり時の発表では、FWの画面をプロジェクタに表示し、関連するアノテーションとシーンを提示しつつ行った。

### 3. 共有方法の分析

気づきの共有方法を分析するため、ビデオ撮影した合同ふりかえりを観察し、参加者の気づきがどのように共有されていくかを図式化する。ここでは、気づき共有の起点の違いにより、共有方法を二つに分類して示す。

**パターン1** このパターン(図2)では、進行役が指名した発表者の気づき1(アノテーション)を起点にする。進行役がFW上の当該アノテーションを表示したり、当該シーンを再生することにより、発表者を補助しつつ、発表者が詳しい説明(図2A)を行う。また、聴衆の学生は、気づきに対して、質問や意見を述べる。さらに、進行役は収録された授業の背景情報(例:教師情報、使用している教科書、カリキュラムなど)を提供するとともに、日本語教育の指導法などの観点からシーンを解説した。

このパターンでは副次的に気づき2の共有が行われる。進行役が気づき1のシーンの周辺アノテーションや、同種の現象に対するアノテーションをFWのアノテーションリストで探し、当該の学生に発表を促す(図2B)。なお、発表時は気づき1と同様、進行役が適宜質問や補助、解説を行う。

**パターン2** 図3のパターンは、進行役が「特徴的なシーン」を指定して(図3C)、そこにアノテーションしていた学生に気づきの発表を促すものである(図3D)。今回は、(a)アノテーションの集中

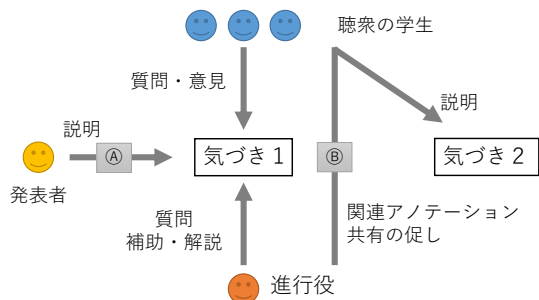


図2: 共有パターン1

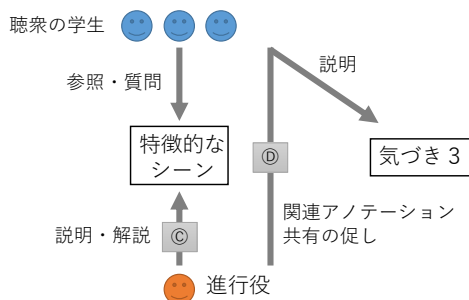


図3: 共有パターン2

していたシーン、(b)4名の日本語教師により別途実施した観察でアノテーションが集中していたシーンを用いた。進行役はこのシーンの解説をした後、その周辺のアノテーションを学生の観察結果から探して、当該の学生に気づき3の発表を促す。

### 4. 考察

本稿では気づきの共有方法として、二つのパターンを示した。いずれのパターンでも、おおむね、観察結果や授業ビデオに基づいた説明や解説が行われていることを確認することができた。

ただし、体験に基づく意見や、観察対象の授業の背景情報など、実践の場に資料が提示されない情報も存在した。また、図2, 3に示したように、進行役の役割は大きく、観察対象の授業に関する背景知識の準備、FWの操作習得を事前に行っておく必要がある。これらは今後の課題である。

### 5. おわりに

本稿では、日本語教師の授業の観察とふりかえりにFWを導入した結果を報告した。今後、前節で述べた課題の解消のため、FWを用いたふりかえり支援方法に関する小冊子を作成する予定である。

**謝辞** 本研究はJSPS 科研費 26560135, 17K01105の助成を受けたものです。

### 参考文献

[1] 山口昌也, 大塚裕子 (2018): ビデオアノテーションシステム FishWatchr を用いたディスカッション練習における観察と振り返りの分析, 日本教育工学会第34回全国大会予稿集

[2] 山口昌也, 森 篤嗣 (2019): 教育活動に対するリアルタイムアノテーションの特徴と振り返りにおける効果分析—小学校におけるプレゼンテーション発表会を例にして—, 第43回社会言語科学会研究大会予稿集, pp.162-165